

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム

派遣研究報告書

2012 年 12 月 1 日

派遣者氏名(専門分野)	石川 禎仁 (東洋史学)
-------------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	敦煌・トゥルファン文書の古文書学的調査とオアシス地域における水利調査
-------	------------------------------------

派遣期間

2012 年 8 月 27 日 ～ 2012 年 9 月 9 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	中華人民共和国	敦煌	敦煌市博物館	
	〃	トゥルファン	吐魯番学研究院・吐魯番博物館	湯士華氏・曹洪勇氏
	〃	ウルムチ	新疆維吾爾自治区博物館	

派遣先で実施した研究内容

報告者の研究の主眼は、現在の中国西部・甘粛省に位置するオアシス都市・敦煌の社会構造を、9世紀中葉～10世紀を中心に明らかにすることにある。敦煌は、沙漠経由のシルクロードの要衝として栄えたことが知られているが、当該時代、すなわち中国中原王朝でいうところの唐末～五代～宋初の敦煌は「帰義軍時代」と呼ばれ、帰義軍節度使が中国中原王朝から自立し、ほぼ独立政権として独断を強めた、特色ある時代である。その中で報告者は、とくに一般民衆の社会生活様式、および在地政権による一般民衆への支配構造を、いわゆる「敦煌文献」を用いて分析・再構築している。

本調査は、敦煌地域の「自然環境」を現地景観調査をすることによって、文献史料から情報を引き出す際の指針と、論証における説得材料を得ることを第一の目的とした。

自然環境というものは、そこに生活する人びとが構築する制度や生活様式の形成に対し、大きな影響力をもつ。しかしながら報告者が使用する文書史料には、書いた人間にとっての「自明の事柄」は記載されない。そのため、史料を正確に解釈するためには、気候・地形・位置関係・水資源の状態など、周囲の状況を正しくかつ現実感を持って踏まえることが重要であり、これらを把握してこそ、より蓋然性の高い想定を立て、結論を導くことが出来る。さらにその他の文献史料にフィードバックすることで、これまでの研究ではある事象に対して、その事象に直接関わる史料のみしか使用してこなかったが、現地のあらゆる実情を加味して考慮した結果、その事象とは直接関わらない史料であるが、利用出来る情報を載せている史料が新たに見出され（関連性を指摘することが出来）、新たな議論を展開することが出来る。

上記目的を達成すべく、まず敦煌オアシスにおいては、オアシス内を徒歩または自転車の走行により踏査した。莫高窟などで知られる敦煌であるが、莫高窟を含め陽関・寿昌城址といった遺跡はオアシスから離れている。一方オアシス内の前近代遺

跡は、清代敦煌城の城壁の一部が僅かに残る程度である。そのため歴史学の観点から敦煌オアシス内部を対象として実施された調査は少ない。本調査において、手段を徒歩あるいは自転車としたのは、これまで顧みられることの少なかった敦煌オアシス内部の地形、とりわけ農地の配置・水路状況などを出来るだけ細かく観察し、オアシス社会の様相を人間の生活レベルから調査することに主眼をおいたためである。

ついで、敦煌オアシス出入に際して、あるいはオアシス内部踏査時に実際にオアシス周縁にまで至り、敦煌オアシス周辺の沙漠地域・山々などの自然環境を観察した。

また、敦煌と同様に多くの文献史料を出土し、オアシス社会の水利状況を明らかにするためにも重要な地位を占めるトゥルファン地域においても、オアシス内外の環境調査をおこなったほか、本学荒川正晴教授・広島大学白須淨眞准教授の指導のもと、古墳群や故城址などの遺跡を調査した。さらにトゥルファンでは、古墳群より発掘された文献史料、木函など遺物といった出土文物を調査し、その手法を学んだ。なお、敦煌市博物館・吐魯番博物館・新疆維吾爾自治区博物館などでは、周囲の環境や歴史の沿革、発掘状況などの情報を得た。

裏面に続く

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

敦煌オアシス付近の河川、あるいは春先の雪解け水の水flow痕の方向を見ると、この地域では水flowはおよそ南→北方向に流れ、最終的に東→西に流れる独利河（現・疏勒河）に対して垂直に注ぎ込む。敦煌オアシスに流れ込む甘泉水もまた、付近の水flowと同様、南方の祁連山脈から北流している。しかし甘泉水の場合、敦煌オアシスの手前に鳴沙山・無窮山という山並みが東西方向に伸びており、水flowが妨げられている。そのため鳴沙山の南面で行く手を阻まれた甘泉水は、山裾に沿って大きく迂回し、西流して敦煌オアシスに入った後、大きく歪曲して北流を開始する。

このような水flow方向を考慮すると、①障害物である鳴沙山を、その西端、現在の党河ダムを超えた時点で、水が流れやすい方向＝低地は北方向よりもむしろ東方向であるが、②途中で北流を開始するのは、この地点から南→北の傾斜角の方が、西→東の傾斜角を上回り、より勾配が強くなり始めた結果と考えられる。また、清代・道光11年（1831）に編纂された『敦煌県志』に描かれる敦煌オアシスの渠道の方向は、甘泉水を挟んだ東部・西部地域で大きく方向が異なっている。さらに、T.P.C. (Tactical Pilotage Chart, 1:500,000. 米国国防総省作成衛星図)などの地図を見る限り、甘泉水以東の地域での水flowは、相当混雑している。

以上の観点から、敦煌オアシスの土地勾配は一樣ではないと想定される。それ故オアシスに設置されている渠も、特に取水・排水などの点で、オアシス内での地域差があると想定された。

今回の敦煌オアシスの調査では、渠の配置や道路の勾配などから、敦煌オアシス西部地域は、全体的に西→東へと傾斜していることが認められた。この傾向は、甘泉水に近い地域（現・南堡村～羽灘村付近）においても、また敦煌城よりも北の地域（現・張家湾～五号湾付近）においても同様であり、甘泉水東流の主要因と言える。同時に、水路の観察から南→北への傾斜読み取れた。よって、敦煌オアシス西部地域においては、当初の想定通り、南西部分が最も高く、北東部分が最も低いという結果が得られた。故に、唐代～帰義軍時代の渠の復元をおこなった李正宇氏が、当該地域の渠道想定図を東北方向に描いたのは、実際の地形と照らし合わせても理にかなっていると言えることが分かる。

敦煌オアシス東部地域では、広範囲に亘る調査は能わなかったものの、西部地域と同様、西→東への傾斜への傾斜が窺えた。ただし、その傾斜は西部地域より比較的緩やかなものと思われる。また、敦煌の街中を流れる党河より数百メートル東側に、敦煌オアシス南部地域において分水する中規模な水路がある。こちらも党河の名称で呼ばれており、実際の灌漑水利などに用いられているものと見受けられる。この党河（水路）の更に東側、現・上蘭州地区において、大きな地面の陥没（数m）を確認した。この地域では、畑一区画の面積が狭く、かつ段々畑の様相を呈しており、また道の両側で、田地の高さが1m程度異なるなど、高低差に富んでいることを確認した。その一方でオアシス東北部では、一区画の面積が広く取られ、比較的平坦な土地であることが観察された。

以上の様に、敦煌オアシスにおいては、地形について一定ではないという結果が得られた。土地が一樣でなければ、耕作の手間や肥料状態、そして何より引水や排水の条件が異なるため、土地に優劣が生ずるであろうことは想像に難くない。

帰義軍期の敦煌オアシスでは、土地売買・土地交換・耕作委託なども盛んにおこなわれていたことが、敦煌文献中の契約文書に看取される。先行研究においてはこれまでさほど注意されてこなかったが、土地の優劣という新たな要素を視点に入れて史料を読解すれば、土地売買にしても、性格は大きく異なってくる。敦煌文書の読解のみでは、ある程度の想起に留まっていたが、本調査により、その確信は更に強いものとなった。

さらに、実際に敦煌オアシスを踏査したことにより、州城から農地、取水口から渠の末端部といった生活空間の距離感を得られた。これは居住地から農地への所要時間や文書伝達速度などを、現実的な範囲で考えるための考慮材料となり得る。

また、トゥルファンにおける文書調査にあたっては、トゥルファン文書の実物を扱うことでその実態を認識した。今後、写真版を用いて研究をおこなうに際しても、実態を正しく把握することが出来ると思われる。さらに、写真版では判読し難かった文字を実見・観察し、釈読の手掛かりを得た。

派遣後の研究発表の予定

現在、現地調査報告を、中央アジア学フォーラムで発表予定である。

また、本調査の内容を取り入れた、帰義軍期敦煌オアシスにおける、人と農地の配置に関する論文を執筆中である。